

言語行動の意識調査

国立国語研究所
西原 鈴子

電子メディアが人々の情報交換を高速化し、世界的規模での情報の受信・発信が可能になった。また、国内外の人の動きがかつてないほど頻繁になったことによって、私たちの日常生活の中で、言語・文化的背景を異にする人々に関する情報の入手も、実際の生活場面での接触も、もはや特別な出来事ではなくなっている。メディアおよび実際生活での接触は、基本的には知識面・情緒面で国際理解を可能にする確実な一歩である。しかし、今日の世界では民族紛争が後を絶たず、局地的戦闘状態も多くの地域の現実である。第三者から見れば無意味ないがみ合いと思えることがらが、当事者間では深刻な社会問題であることも非常に多い。コミュニケーションを試みるからコミュニケーション・ギャップが生まれるという皮肉な因果関係が成立してしまうのである。しかし、好む・好まざるに関わらず、仕事その他の目的で人々の移転・移住・滞在は継続し、慣れない環境での言語生活は多くの課題を提供する。

研究班2・国語研グループでは、コミュニケーション場面で経験・観察される対人的な葛藤や摩擦について、その姿や内容の多様性、言語的・社会文化的背景などを把握し、実際の言語場面における問題解決の手がかりを提示することを目的として、海外に在住する日本語母語話者、および国内に在住する日本語非母語話者を対象に、日常的な生活場面での言語行動に関する実験的な意識調査を実施してきた。特定のコミュニケーション場面について、テレビドラマから適切と考えられた部分を抜き出して、編集・提示し、それぞれの場面についての意識のあり方を面接質問形式で聞き出し、記録するという手順を踏んでいる。選ばれたのは、以下の6言語場面である。([]内は言語機能)

- (1) ビルの廊下で知らない人と肩をぶつける
[謝罪/叱責]
- (2) 職場で、同僚にお茶を出す/出される [サ

ービス/感謝]

- (3) 家庭の食卓でソースをこぼす [謝罪/弁解]
- (4) 役所の窓口でパスポートの再発行を依頼する [説明/依頼]
- (5) 役所の窓口で順番の割り込みをする/される [割り込み/応対]
- (6) 頼み事の返事を聞く/ 返事を保留し、 断る [依頼/婉曲な断り]

被験者は、それぞれの場面について、自分の出身地域の言語行動と、現住地域のそれとを対比しながら意識化していくことを求められる。対象となった地域は、アメリカ・フランス・ブラジル・韓国・ベトナムである。

調査結果は、各地域ごとにまとめられ、調査の進展と共に共通のデータ・ベースが構築されていく。その際に、地域ごとに類型化できる項目もあるが、むしろ被験者の個人的属性や背景が一つの切り口となる可能性も予測することができる。例えば、異文化適応に関して一般的に言われているように、「地域での滞在年数が長くなればなるほど地域の情報に関する一般化をしなくなる」ということが、この調査結果からも言えるのか、被験者の年齢が場面の見方を決めるか、性差はどうか、家族内の言語使用状況は居住地域に関する見方に影響を与えるか、などの疑問に対する答えが得られる可能性である。各地域から得られるサンプル数はそれぞれ最低30であるが、それだけでは統計的資料としては不十分であろう。ただし、地域内の文化的要因としての職業、居住年数、年齢、性差、家族関係などは、それによってサブカルチャーを構成する可能性を持っている。それらが今回の調査データの中で見せる振る舞いによっては、グローバル・コミュニケーション時代にあって、いわゆるエスニックな「文化」でない共通「文化」の存在を考える糸口となるかもしれない。

以下に、場面(1)に関して現在までに入力された質問と回答、および被験者によって語ら

れた居住地域の印象を例示する。

これから、短い映像を見ていただきます。出てくる場面は、日本のマンション（集合住宅）の廊下です。二人の女性がすれちがう時に、一方が急いでいたためにぶつかりそうになり、ちょっと体がふれあいました。二人は、互いに見知らぬ同士です。二人は何か言葉をかわしていますが、まず、音声を消して見ていただきます。

ない人と肩をぶつける」[謝罪/叱責から

【設問 1.1.0.1.1】

まずこの場面を、[日本・東京]での日本人同士の出来事だとして考えて下さい。[日本・東京]では、この二人のうち、どちらから声をかけるのが普通だと思いますか？

（96年7月段階で入力済みの部分だけ。以下同様）

	A	B	C	D
<u>ブラジル</u>	6		3	5
<u>フランス</u>	2	4	2	
<u>韓国</u>	7			
<u>米国</u>	2	3	1	0
<u>ベトナム</u>	1	2		9

- A ぶつかった方
- B ぶつかられた方
- C どちらとも決まらない
- D 無回答

コメント

ブラジル

ぶつかった方は「オ怪我アリマセンデシタカ。」（「アッ」など声を出すのはぶつかられた方）

そもそも廊下を走ることが悪い。日本よりもブラジルの方が廊下を走ることについてうるさい。

ブラジルで廊下を走っていたら泥棒と間違われる。

フランス

声をかけるべきだとすれば、ぶつかった方。言わなければいけない、謝らなければいけないという感覚から。最初に声を発するのは年上の女性。「キヤー」「アー」など。

どちらも声はかけない。ぶつかられた人は「アレ」と言い、もう一人は急いでいて無我夢中で走って行ってしまっただろう。走っている人はもう姿を消してしまっているのではないか。

米国

相手の表情や態度によって言葉を使い分けることがあるのではないかと。若い女性か、おじさんかによっても使い分ける。ビデオの雰囲気では、ぶつかられた方が何か言いそうだ。

（ビデオの映像ぐらいだったら）ぶつかった方はあまり当たったことに対する意識がない。当たられた方が、ショック。びっくりして。

ぶつかられた方が「チョットアンタ」と言う。

ぶつかられた方が、言葉ではなく、声を発する。

【設問 1.2.5】

（刺激映像を音声付きで提示した後）同じ場面が、もし[この国]で、この国の人同士の間で起きたとしたら、あやまる方の人は、この日本の映像と違った謝り方をするとお考えですか？ それとも、大体同じような謝り方でしょうか？

大体同じだろう

言葉： / 身振り： / 表情：

異なるだろう

言葉： / 身振り： / 表情：

回 答

	A	B	C	D
<u>ブラジル</u>	1	9		4
<u>フランス</u>		2 3	3	2
<u>韓 国</u>	1	6		
<u>米 国</u>	6	2 6		3
<u>ベトナム</u>		1 9		2

- A 大体同じ
- B 異なる
- C 要素によって
- D 無回答

コメント

主に「異なる」と答えた被調査者のもの

ブラジル

走ってきてぶつかる相手は、ひったくりか泥棒なので気をつける。ブラジルでは、走ってくること自体が少ない。普通の人にはぶつかれば何か言う。言わないのは泥棒くらい。この程度なら謝らない。ただし相手に当たったという自覚があるなら謝る。(ブラジル人は基本的に自分の罪を認めたがらず、謝らない。ぶつかっても 90%は謝らない。相手が真ん中を歩いているからだ、相手がよけるのが当然だと解釈する。)

フランス

大丈夫ですかという感じで、体に触れたりする。身振りもある。頭は下げないが、それにふさわしい態度。「Excusez-moi, madame」「Je suis pressée (急イデイトノデ)」とか言う。頭は下げない。言い訳(「急イデイトノデ」など)をしそう。会釈はしない。真正面を向いて謝ることはしない(ちょっと振り返るくらい)。相手の目は見る。言葉は日本と大体同じだが、悪いことをしたというような顔をしない。自分が謝らなければいけないようなことをしたかどうかが問題で、そういうことをしていたらきちんとして謝る。

きちっと謝るか、逆にむっとするかのだちらか。照れ笑いしながら「ア、スイマセン」という感じはない。

一般的には逆にむっとして、さっとなってしまふ。何か言うかもしれないが言っても全然反省もしないし、何だこの人という感じでぱっとなってしまふ。言葉は「Pardon, madame」と言うが、態度は謝るよう態度ではなくなる。

笑ってたらケンカになる。相手にあんなに嫌味な言い方をされたら、若い方は必ず自分が急いでいた理由を正当化する。ぶつかられた方が嫌味ったらしく言ったら反論する。そこにいるのが悪いんだ、など。謝り方はもっと軽い。謝る場合は媚びない。ぼーっとして歩いている方が悪いなどと相手に言い返すかもしれない。

フランス人の場合、ケンカでも一時的にぱっとなってしまっても、うらみつらみが残らない感じ。もちろん抗議はするし、ぶつかった方も謝るだろうが、もっとクール。身振りは、抗議する側はもっと大げさに、謝る側はもっと簡単で気楽なもの。

韓国

謝らない。お互いに平然としている。もう少し軽い謝り方。「どうも」ぐらいの韓国語か、会釈だけとか。(相手の年齢差によって、先生や年上の人には深く謝るかもしれない。)日本と大体同じ。(若い男性の方が同じように謝ってくれる気がする。)身振りも言葉もきちんと、ワンランク上の答え方をする。もしこのような感じで謝ったら、叱られる。

米国

ぶつかった相手の所まで戻る。必ず体に触る。大丈夫かと聞く。なぜ急いでいたかの理由を言う。言い訳をする。年格好だけで言えば、もっとちゃんと謝る。動作付き。肩と腕に手をもっていき「大丈夫デスカ」。お辞儀はしない。駆け寄って、「Are you OK?」と聞く。

近づいてきて、目と目ではなく言葉をならべて謝る。なぜぶつかったのか、なぜ急いでいるのかの理由を言う。言うことで一件落着する。大きなトラブルになる前に納得するまで言葉で謝罪する。

会釈はしない。まず言葉で。ごまかし笑いはしない。謝りはするが、相手につけこまれないようにガードするのではないが。

表情、口調など、もうちょっと誠意がこもる。

もっとちゃんと謝る。相手の目を見て正面を向いて。

日本と異なり、笑ってはいけない。痛々しい表情をつくる。(相手が怒っている時に笑ったらふざけていると思われる。気を配りたいならば、Are you alright? などと付け加える。)

無理して両方にっこりする。

ベトナム

曖昧に笑ってごまかす。むっとしている。お辞儀をしない。「ゴメンナサイ」を言わない。習慣の違いから、ベトナム人にとって悪い事ではなくて叱られてその理由が不明でも笑いでごまかす。

ベトナム人は自己主張が強いので、相手に言われたら言い返す。あまり謝らない。表情や表現が豊かで、身振りが派手。人

差し指で相手を指差すことが多い。

お辞儀はしない。その場しのぎにもっと軽く「ゴメン(ナサイ)」位には謝るかも。謝るより言い訳をして自分を正当化する。頭を下げない。笑う。常套句ではないが「そんなことで怒らないで。」にあたる言葉を言う。「トンカム」はよく言うが、「ゴメンナサイ」にあたるベトナム語は使わない。(「スイマセン」にあたるベトナム語は、「自分の間違い」と「許して」をつなげた西洋文化流入以後の造語。「トンカム」は、「仕方ガナカツタ」「同情シテ大目ニ見テヨ」という感じ。)

何も言われなければ無言。言われたら「ノープロブレム。」または「何も被害ハナイジャナイカ。」「何か被害カ問題ガアルカ。」などと言う。

謝らない。互いに見合っただけのまま行ってしまう。ぶつかられた人は後ろ姿に向かってぶつと文句を言う。

ぶつかられた人は映像と同タイミングで「何ヲヤッテイルノカ。注意シロ」と言う。ベトナムの方がきつい。ぶつかった方は謝らない。

少しお辞儀。言い訳する。苦笑いする。(ベトナム人は謝るのが嫌い。プライドが非常に高い。ハノイとホーチミンでは気候に左右されてか全く異なる。)